

2012年度・研究員活動報告

2012 Research Reports

コミュニティ福祉研究所所員
立教大学名誉教授

氏名	福山 清蔵
論文	福山清蔵 (2013) 『コミュニティ福祉研究所研究報告書』コミュニティ福祉研究所, 3月.
資料・研究ノート等	福山清蔵 (2013) DVD「介護にまつわる自殺・心中を防ぐために」コミュニティ福祉研究所, 12月.
学会発表	2013年3月 自殺予防シンポジウム in 秋田「介護にまつわる自殺・心中を防ぐために」シンポジスト 自殺予防学会.
学内・学外における社会的活動等	1) 2013年3月 杉並区自殺対策講演会「介護にまつわる自殺・心中を防ぐために」 2) 東京都港区, 新座保健センター

コミュニティ政策学科

氏名	和 秀俊
論文	1) 遠藤伸太郎, 和秀俊, 大石和男 (2012) 「Sports Activities and Sense of Coherence (SOC) among College Students」『International Journal of Sport and Health Science』第10号, 1-11. 2) 和秀俊 (2012) 「男性退職者の地域社会に対する意識の測定尺度の検討—地域生活者尺度の開発にむけて—」『まなびあい』第5号, 90-98. 3) 和秀俊 (2013) 「社協ボランティアセンターに求められる役割—ボランティア活動者調査から—」『立教大学コミュニティ福祉学部紀要』第15号, 51-74.
資料・研究ノート等	1) 和秀俊 (2012) 「さいたま版ソーシャルビジネス促進モデルの構築～「新しい公共」を担う多様な拠点の可能性～」2011年度県と県内大学との連携による政策研究中間報告書. 2) 森本佳樹, 松山真, 湯澤直美, 杉浦克己, 和秀俊 (2012) 「被災地および被災者の支援のあり方に関する探索的研究～生活者の視点から～」立教大学学術推進特別重点資金 (立教SFR) 東日本大震災・復興支援関連研究 (共同研究型) 2012年度研究経過報告書. 3) 和秀俊ほか (2013) 「スポーツによる元気な若者社会を創るために」平成24年度文部科学省委託ライフステージに応じたスポーツ活動の推進のための調査研究報告書. 4) 和秀俊ほか (2013) 「高齢者の体力づくり支援事業報告書」文部科学省委託平成24年度高齢者の体力づくり支援事業報告書.
学会発表	1) 和秀俊, 西村昌記, 三田泰雅, 遠藤伸太郎 (2012) 「高齢男性の地域社会に対する意識の測定—コミュニティネス尺度の開発—」日本老年社会学会第54回大会口頭発表. 2) 西村昌記, 和秀俊, 三田泰雅, 遠藤伸太郎 (2012) 「高齢男性の社会参加とライフスタイル」日本老年社会学会第54回大会口頭発表.

学会発表	<ul style="list-style-type: none"> 3) 三田泰雅, 和秀俊, 西村昌記, 遠藤伸太郎 (2012) 「高年男性のサポートネットワークと社会的孤立」日本老年社会科学会第54回大会口頭発表. 4) 濁川孝志, 新谷健介, 和秀俊, 石渡貴之他 (2012) 「Effects of sumo exercise on alleviating lower back pain」ECSS's 17th Annual Meeting. 5) 河西正博, 和秀俊, 松尾哲矢 (2012) 「身体に障害のある児童生徒の体育授業に関する研究」日本体育学会第63回大会口頭発表.
学内・学外における社会的活動等	<ul style="list-style-type: none"> 1) 特定非営利活動法人志木総合型地域スポーツ・レクリエーションクラブ 副理事長 2) 新座市地域デビューセミナー運営委員会 オブザーバー 3) 新座市地域活動コーディネーター養成講座 講師・ファシリテーター 4) 新座市地域デビューセミナー 総合コーディネーター 5) ダイヤ財団DaiaL 監事 6) 平成24年度文部科学省受託事業「ライフステージに応じたスポーツ活動の推進のための調査研究」トライアル事業評価ワーキンググループチーフ 7) 杉並区社会福祉協議会ボランティア・地域福祉推進センター 運営委員, 調査部会長 8) 東京都広域スポーツセンター講演会 講師・シンポジウムコーディネーター 9) 和泊町社会福祉協議会基調講演 講師 10) 杉並区地域福祉フォーラム基調講演 講師 11) 杉並区ボランティア交流会基調講演 講師 12) 県と県内大学との連携による政策研究「さいたま版ソーシャルビジネス促進モデルの構築」平成23～24年(研究代表者) 13) 武蔵野銀行産学連携推進事業「ソーシャルビジネスの育成・支援に関する研究」平成23～24年(研究代表者) 14) 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「うつ病者の社会的支援」および「自殺予防」に関するソーシャルモデル研究・開発」平成22～26年度(研究分担者) 15) 文部科学省科学研究費基盤研究(C)「要介護社会における腰痛と心理的要因の関連性検討」平成22～24年度(連携研究者) 16) 立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)東日本大震災・復興支援関連研究(共同研究型)「被災地および被災者の支援のあり方に関する探索的研究～生活者の視点から～」平成23～25年度(研究分担者)

氏名	河東 仁
資料・研究ノート等	<ul style="list-style-type: none"> 1) 河東仁 (2012) 「異人とムラ——《こんな晩だったな》物語——」『共に生きるための市民福祉講座 記録集』わらじの会, pp.243-267. 2) 河東仁 (2012) 「宗教学、そして夢文化——もう一つの別の広場——」武蔵73会編『僕らが育った時代 1967-1973』れんが書房新社, pp.136-143. 3) 河東仁 (2013) 「岩倉大雲寺妙見の瀧における精神医療をめぐって」『宗教研究』375号, pp.360-361. 4) 河東仁編 (2012) 『夢と幻視の宗教史』リトン社, pp.1-404.
学会発表	河東仁 (2012) 「岩倉大雲寺妙見の瀧における精神医療をめぐって」第72回日本宗教学会大会, 三重, 9月.
学内・学外における社会的活動等	新座市障がい者就労支援センター運営委員会会長

氏名	北島 健一
論文	1) 北島健一 (2012) 「非営利・協同組織は『雇用と福祉』をめぐるとどう向き合うのか」『経済科学通信』No.130, pp.33-38.

論文	2) 北島健一(2012)「社会的企業の国際的動向と経済危機下における可能性」『福祉労働』No.137, pp.34-44.
資料・研究ノート等	1) ジャン＝ルイ・ラヴィル(2013)「公開講演会記録 連帯経済とフランス福祉社会」『立教大学コミュニティ福祉学部紀要』第15号, 3月, (記録作成). 2) 厚生労働省平成24年度(2013)「セーフティネット支援対策等事業費補助金 社会福祉推進事業」『生活困窮者・孤立者の就労による生活再建の先進事例とあるべき仕組みに関する調査研究事業 報告書』3月, ホームレス資料センター(分担執筆, pp.10-18)(大高研道氏との共著).
学会発表	北島健一(2013)「基調講演の解説(パネリスト)」日本NPO学会 第15回年次大会 公開シンポジウム「多元的経済と市民社会:社会的企業・社会的経済・連帯経済の可能性」東洋大学, 2013年3月17日.
学内・学外における社会的活動等	1) 第25回共同連全国大会東京大会 自主講座「社会的経済(連帯経済を含む)と社会的事業所」報告「コミュニティ経済の担い手としての連帯経済と労働」立教大学, 2012年9月2日 2) 基礎経済科学研究所第35回大会 共通セッション「非営利協同組織の可能性」報告「今日における非営利・協同組織の『社会的存在意義』を求めて」京都橘大学, 2012年9月15日 3) 協同総研「2012年 国際協同組今年と協同労働」研究会 報告「連帯経済とは—新しい福祉社会の創造へ—」日本労働者協同組合連合会(ワーカーズコープ)連合会, 2012年10月6日

氏名	空閑 厚樹
論文	1) 空閑厚樹(2012)「持続可能なコミュニティ運動に基づくコミュニタリアン・バイオエシックスの検討」『生命倫理』23号, pp.34-41. 2) 空閑厚樹(2012)「『3.11』後の暮らしのあり方についての考察—持続可能なコミュニティ実践を手がかりとして—」『まなびあい』第5号, pp.70-78.
資料・研究ノート等	1) 小野直哉, 空閑厚樹, 佐藤太, 林悦子, 古橋道代(2013)「持続可能な暮らしと生活の質の向上の両立はいかにして可能か—実践事例からの検討—」『立教大学コミュニティ福祉学部紀要』第15号, pp.91-108.
学会発表	1) 第71回日本宗教学会パネル「宗教的「いのち」観の危機と課題」(安藤泰至(代表者), 大河内大博, 空閑厚樹, 竹之内裕文, 脇坂真弥)皇學館大学, 2012年9月9日. 2) 第24回日本生命倫理学会報告「『探掘して収奪する』生活から『育てて収奪する』生活へ—福祉の充実と持続可能な暮らしの在り方についての検討」立命館大学, 2012年10月27日.
学内・学外における社会的活動等	1) 日本生命財団平成24年度若手研究・奨励研究「持続可能な暮らしの実践における環境負荷軽減の取り組みおよび生活満足度に関する研究」 2) 2011年度～2013年度立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR 東日本大震災・復興支援研究/個人研究型)「震災後復興構想における持続可能なコミュニティ形成の方法論に関する調査研究」 3) 埼玉県農業ビジネス支援課中山間「ふるさと支援隊」平成24年度事業(「対話から紡ぐ地域活性化」を活動理念とし, 人々とのつながり, 自然とのつながりの価値を再発見し地域活性化企画を実施する)

氏名	熊上 崇
著書	熊上崇(2012)『発達障害白書2013年度版』明石書店(分担執筆)「発達障害のある少年事件と学校教育」.

論文	熊上 崇 (2012)「司法におけるKABC-IIの活用」『KABCアセスメント研究』14, pp.97～106, 2012.
学会発表	1) 熊上 崇 (2012)「司法におけるKABC-IIの臨床的活用」日本KABCアセスメント学会 山形大学, 8月. 2) 熊上 崇 (2012)「日本版KABC-IIを利用した少年のアセスメント」日本犯罪心理学会 大正大学, 9月.
学内・学外における社会的活動等	逗子市教育研究所 研究会講師 広汎性発達障害および学習障害を有する青少年の特徴と対応 2012年7月

氏名	小長井 賀與
著書	1) 単著 小長井賀與 (2013)『犯罪者の更生とコミュニティー司法福祉の視点から犯罪を考える』成文堂. 2) 共著 松本勝, 小長井賀與, 他 (2013)『更生保護入門』成文堂. 3) 翻訳 (共訳) 林 浩康, 小長井賀與, 他, (2013)『ソーシャルワークと修復的司法』明石書店.
論文	1) 小長井賀與 (2013)「福祉の充実だけでは尽きない犯罪者処遇—調査研究から推し測る犯罪者のニーズ」, 『罪と罰』50巻2号』 pp.138-154. 2) 小長井賀與 (2012)「地域に根ざした犯罪者処遇—犯罪者を地域福祉に繋ぐ」, 『犯罪と非行』171号, pp.30-44. 3) 小長井賀與 (2012)「犯罪研究動向—一性犯罪者処遇の動向」, 『犯罪社会学研究』37号, pp.139-145.
資料・研究ノート等	小長井賀與 (2013)「研究の到達点と今後の課題」『犯罪者の更生と地域のパートナーシップに関する研究』(科学研究費補助金 平成24年度報告書).
学会発表	小長井賀與 (2012)「Measures to Prevent Recidivism by Ex-Offenders - A Japanese Perspective Encouraging Reintegration into Community」, 第12回欧州犯罪学会, スペイン・ビルバオ.
学内・学外における社会的活動等	1) 立教大学コミュニティ福祉研究所と日本更生保護学会共催のシンポジウムの企画・運営 (2012), 「犯罪者処遇における再犯抑止と更生支援」 パネリスト Professor Tony Ward, ニューージーランドVictoria 大学 Wellington校 2) 日本更生保護学会設立記念大会を, 大会運営委員長として, 立教大学池袋キャンパスで開催, 12月

氏名	坂田 周一
著書	坂田周一 (2012)「社会福祉学における対象認識の固有性」日本社会福祉学会編, 『対論社会福祉学1 社会福祉原理・理論』中央法規出版.
論文	坂田周一 (2012)「オーストラリア連邦における自殺予防の枠組み」『うつ病者の社会的支援』および「自殺予防」に関するソーシャルモデル研究・開発』(2011年度報告書) 立教大学コミュニティ福祉学部・コミュニティ福祉研究所.
学内・学外における社会的活動等	1) 社会福祉士試験委員 2) ユニバーサル財団研究助成審査委員 3) 一般財団法人厚生労働統計協会評議員

氏名	坂無 淳
学会発表	坂無淳(2012)「パイプラインは水漏れしているのか―世代別大学教員の女性割合分析―」第85回(2012年度)日本社会学会大会, 札幌学院大学, 11月.
学内・学外における社会的活動等	ジェンダーの社会学研究会(北海道札幌市, 2012年12月, 2013年2月他)の主催

氏名	三本松 政之
著書	三本松政之(2012)「外国籍移住生活者にみる社会的バルネラビリティとそのシティズンシップ」日本社会福祉学会編『対論 社会福祉学2 社会福祉政策』中央法規.
資料・研究ノート等	三本松政之(2013)「研究の到達点と今後の課題」『移住生活者の生活支援と移民政策における福祉課題の位置づけに関する日韓比較研究』(科学研究費補助金 平成24年度報告書).
学内・学外における社会的活動等	かながわ国際交流財団 外国人住民総合支援モデル事業 委員

氏名	鈴木 弥生
論文	鈴木弥生(2013)「バングラデシュ・ダウドゥカンディ郡農村の社会開発―貧困女性のエンパワメントに向けたASAの取り組み―」『国際開発研究』第22巻第1号, 国際開発学会, [査読あり].
資料・研究ノート等	鈴木弥生, 佐藤一彦(2012)「関東学院大学人間環境研究所2010年研究プロジェクト報告抜粋: グローバリゼーションと経済・社会環境の変化」『関東学院大学人間環境研究所報』関東学院大学人間環境研究所, pp.77-82 [査読なし].
学内・学外における社会的活動等	<p>文部科学省科学研究費基盤研究(C)「バングラデシュの貧困と国際労働移動に関する実態調査」2011～2013年度予定</p> <p>我々が1999年度より文部科学省科学研究費助成による調査を継続しているクミッタ県ダウドゥカンディ郡は, 日米主導の援助や開発によって農村の近代化が推進されてきた地域である。それは, 一部の既得権益者に利益をもたらしたものの, 貧困層の雇用機会はむしろ減少傾向にある。そして近年では, 現金収入を得ることを目的として海外出稼ぎ労働に就く人々が増加している。</p> <p>バングラデシュ全体では, 2011年度の海外出稼ぎ労働者総数のうち, アラブ首長国連邦が約半数を占め, かつ最大数を擁している。そこで2012年11月, アラブ首長国連邦の中でも出稼ぎ労働者が集中しているアビダブとドバイにおいて, 途上国より移動した166人から聞き取り調査を行った。このうち, 49人がバングラデシュ出身者であった。彼・彼女らの中で, 48人の職種は未熟練労働に限定されていた。</p> <p>また, アブダビ市街にある出稼ぎ労働者の宿泊施設(レーバー・キャンプ)には, 我々が2000年より調査を継続している世帯の家族構成員が滞在している。仕事はアブダビ市内での高層ビル建設であるが, 炎天下での命綱をつけての労働, 食費すら賄えないほどの低賃金である等, 過酷な労働実態が明らかになった。</p> <p>そのほか, 2012年9月, ニューヨークにおいてバングラデシュから移動してきた人々40人から聞き取り調査を行った。彼・彼女らの殆どは, 現金収入を得ること, なおかつ, 家族に送金することを目的としてダイバシティ・ビザを取得して移住している。</p> <p>先行研究の分析, 及び調査内容については, 自らの能力と時間的制約を克服して学会誌等に投稿できたらと考えている。</p>

氏名	外山 公美
著書	1) 外山公美他著 (2012)『国家をめぐるガバナンス論の現在』勁草書房. 2) 片岡寛光監修, 外山公美他著 (2012)『アジアのオンブズマン』第一法規出版.
学会発表	外山公美 (2013)「日本の行政評価・監視制度の現状と課題」 日本法政学会・国立政治大学共催研究会, 台北, 3月.
学内・学外における社会的活動等	1) 東京都港区情報公開運営審議会副会長 2) 行政書士試験制度等調査委員会副委員長 3) さいたま市旧岩槻区役所敷地利用検討委員会委員 4) 日本行政学会 理事・組織財政委員長 5) 日本法政学会 理事・事務局長 6) 日本協働政策学会 理事

氏名	原田 晃樹
著書	藤井敦史, 原田晃樹, 大高研道 (2013)『闘う社会的企業—コミュニティ・エンパワーメントの担い手—』勁草書房.
学会発表	原田晃樹 (2012)「日本の社会的企業の実態とその活動を支える制度的・政策的基盤条件」第60回日本社会福祉学会大会, 関西学院大学, 10月20日.
学内・学外における社会的活動等	(学内) 1) 立教大学ボランティアセンター センター長 (学外) 2) 「社会福祉士国家試験委員会」委員 (財団法人社会福祉振興・試験センター) 3) 「南大塚保育園運営委員会」委員 (社会福祉法人豊島区社会福祉事業団) 4) 「豊島区指定管理者審査委員会」委員長 (豊島区) 5) 「豊島区政策評価委員会」委員 (豊島区) 6) 「杉並区ゆうゆう館運営団体選定委員会・杉並区ゆうゆう館協働事業実施団体選定」副委員長 (杉並区)

氏名	福間 聡
論文	1) 福間聡 (2013)「サバイバー・ギルト (生存者罪責感) 再考 —哲学的解釈による— 試論」 東京大学大学院人文社会系研究科『死生学・応用倫理研究』第18号, pp.137-160. 2) 福間聡 (2013)「「真正な」善・悪はどこにあるのか? —道徳を教育するという視座から—」 国士舘大学哲学会編『国士舘哲学』第17号, pp.22-35.
学会発表	1) Satoshi Fukuma (2012) "Rethinking Survivor Guilt: An Attempt at a Philosophical Interpretation," The 7th International Conference on Applied Ethics (Risk, Justice and Liberty), Hokkaido University, Sapporo Campus. 2) 福間聡 (2012)「「真正な」善・悪はどこにあるのか? —道徳を教育するという視座から—」 国士舘大学倫理学専攻シンポジウム (価値の「真正」性をめぐる諸問題 —「善」・「美」・「身体」から考える—) 国士舘大学世田谷キャンパス. 3) Satoshi Fukuma (2013) "Reflecting on Survivor Guilt: A Reattempt at a Philosophical Interpretation," Tokyo Forum Analytic Philosophy (Jan. 24, 2013), The University of Tokyo, Hongo Campus.

氏名	藤井 敦史
著書	藤井敦史, 原田晃樹, 大高研道編 (2013) 『闘う社会的企業—コミュニティ・エンパワメントの担い手—』 勁草書房.
学内・学外における社会的活動等	英国イースト・ロンドン大学で客員研究員として, 英国の社会的企業やインフラストラクチャー組織のヒアリング調査, 並びに英国の社会的企業研究者と研究交流

氏名	Zane RITCHIE (リッチー ザイン)
著書	Our Over-Reliance on Oil. R. Palmer & R. Miller (Eds.) In Reflections on Peace as a Global Language. Kobe: Mizuyama Sangyo.
論文	<ol style="list-style-type: none"> 1) <i>Projects in the ESL Classroom - An Example Using the Grimm Brother's "The Three Little Pigs"</i>. In Jinsei to Bunka Journal, Aichi University, pp. 97-107. 2) <i>Keeping your Language Teaching Career on Track</i>. Proceedings for the 11th Seminar for English Education, July 21, Kansai University of International Studies. 3) <i>Developing Professional Literacy to Enhance Career Fluency</i>. In R. Chartrand, S. Crofts, & G. Brooks (Eds.), <i>The 2012 Pan-SIG Conference Proceedings</i>. Hiroshima: JALT, pp. 166-174. 4) <i>Application of Content-based Instruction in Japanese University EFL Classes to Instill Global Awareness: The Case of the Geopolitical Challenges of Peak Oil and the End of Inexpensive Energy in Northeast Asia</i>. In Korea TESOL 2011 Conference Proceedings, Seoul: KOTESOL, pp. 63-74. 5) <i>I huff and I puff, but I still can't get in.": Using folk-tales and guided reading in the ESL classroom</i>. In Hawai'i Teachers of English Speakers of Other Languages, The Word, Vol. 21: 3, pp. 6-8.
学会発表	<ol style="list-style-type: none"> 1) <i>Adding Your Own Subtitles to Youtube Videos to Increase their Effectiveness in the EFL Classroom</i>. My Share, December 8, Hamamatsu JALT 2) <i>Utilizing Mobile Devices to Create Materials</i>. JALT2012, October 13, ACT City, Hamamatsu 3) <i>Keeping your Language Teaching Career on Track</i>. At the 11th Seminar for English Education, July 21, Kansai University of International Studies 4) <i>Using Project-based Instruction to Increase Fluency in College-level Classrooms</i>. Pan-Sig, May 16, Hiroshima University 5) <i>Developing your Professional Literacy: A forum on Career Fluency</i>. Pan-Sig, May 17, Hiroshima University

福祉学科

氏名	赤畑 淳
論文	赤畑淳 (2012) 「精神科病院におけるソーシャルワーク業務—PSWに求められる役割と視点」『立教大学コミュニティ福祉学会「まなびあい」』第5号, pp.79-89.
学会発表	赤畑淳, 根間洋治, 西川健一, 稲淳子, 高山亨太, 大塚淳子 (2012) 「聴覚障害と精神保健福祉—現状を打破するための一歩として (自主企画シンポジウム)」第11回日本精神保健福祉士学会, 熊本, 6月.
学内・学外における社会的活動等	<ol style="list-style-type: none"> 1) 公益社団法人日本精神保健福祉士協会「精神保健福祉士業務指針」作成委員会 委員 2) 社会福祉法人聴力障害者情報文化センター主催「聴覚障害者の精神保健福祉を考えるシンポジウム」コーディネーター (全国生活協同組合連合会・全国労働者共済生活協同組合連合会助成事業: 精神保健福祉相談研究事業)

氏名	浅井 春夫
著書	浅井春夫編著 (2012) 『はじめよう！性教育』 ボーダーインク.
論文	1) 浅井春夫 (2013) 「沖縄戦と孤児院一戦後史のなかの児童福祉の空白を埋める」 『コミュニティ福祉学部紀要』 第15号, pp.1-23. 2) 浅井春夫 (2012) 「『子ども・子育て新システム』の落とし穴と保育制度拡充の構想」 『法と民主主義』 No. 467, pp.40-44. 3) 浅井春夫 (2012) 「“いのちの教育”の拡散と性教育での再定義」 『季刊SEXALTY』 No. 58, pp.20-33.
学内・学外における社会的活動等	1) “人間と性” 教育研究協議会代表幹事 (継続) 2) 全国保育団体連絡会副会長 (継続) 3) 日本思春期学会理事 (継続) 4) 『季刊SEXALTY』 編集委員 (継続) 5) 『子ども白書』 編集委員 (継続)

氏名	飯村 史恵
資料・研究ノート等	飯村史恵 (2012) 「第三者評価 求められる市民参加と協働」 福祉新聞 論壇掲載, 5月21日付.
学内・学外における社会的活動等	1) 豊島区補助金審査委員会委員 2) 練馬区社協地域福祉活動計画策定評価・推進委員及び権利擁護センター運営委員会副委員長 3) 特定非営利活動法人さぼーと理事 4) 日本福祉介護情報学会理事 5) 滝乃川学園権利擁護委員会委員, 救護施設あかつき・共働学舎・つるかわ学園グループホーム第三者委員 6) 社団法人日本社会福祉教育学校連盟事務局次長

氏名	岡田 哲郎
学会発表	岡田哲郎 (2012) 「岡村重夫の『民俗としての福祉』概念の検討(3)～『地域社会』の意味と、『地域の力を捉えること』についての一考察～」 第26回日本地域福祉学会, 熊本, 6月.

氏名	河東田 博
著書	1) 河東田博 (2013) 「パーソナルアシスタンス制度にみる自立」 庄司洋子他編 『自立と福祉一制度・臨床への学際的アプローチ』 現代書館, pp.101-118. 2) 河東田博 (2013) 「組織運営への知的障害当事者の参画と自立」 庄司洋子他編 『自立と福祉一制度・臨床への学際的アプローチ』 現代書館, pp.193-210. 3) 河東田博 (2012) 「脱施設化とコミュニティケアの日本的展開」 一般社団法人 日本社会福祉学会編 『対論 社会福祉学2 社会福祉政策』 中央法規出版, pp.105-129.
論文	1) 河東田博 (2013) 「生活基盤の再構築—創造的福祉文化概念を掲げる所—to」 『福祉文化研究』 第22号, pp.5-16. 2) 河東田博 (2013) 「知的しょうがい者と性暴力被害」 『立教大学コミュニティ福祉学部紀要』 第15号, pp.39-49.
資料・研究ノート等	1) 河東田博 (2013) 「一番ヶ瀬康子と創造的福祉文化」 『福祉文化研究』 第22号, pp.107-112.

学内・学外 における 社会的 活動等	<ol style="list-style-type: none"> 1) 岩手県陸前高田市障がい福祉計画臨時策定委員及び特別調査員 2) 日本福祉文化学会会長 3) 『季刊・福祉労働』編集委員 4) 厚生労働省平成24年度障害者総合福祉推進事業(指定課題29)『地域における高齢の障害者の居住支援等の在り方に関する調査・研究』(財団法人日本知的障害者福祉協会)検討委員会委員(報告書, 2013年3月) 5) 2012年度～2013年度立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)自由プロジェクト研究「自立と福祉をめぐる制度・臨床への学際的アプローチに関する研究」(研究代表者)
-----------------------------	--

氏名	柴崎 祐美
学会発表	<ol style="list-style-type: none"> 1) 山本則子, 五十嵐歩, 岡本有子, 高紋子, 松浦志野, 栗延孟, 柴崎祐美, 高野龍昭, 吉澤明孝(2012)「在宅看取り支援に関する調査:訪問看護・訪問介護・居宅介護支援各事業所への実態調査」日本老年社会学会第54回大会, 長野, 6月. 2) 柴崎祐美, 佐藤美穂子(2012)「地域包括支援センターと訪問看護ステーションの連携による訪問型介護予防事業の試行」日本ケアマネジメント学会第11回研究大会, 広島, 7月. 3) 谷口幸一, 所正文, 坂井圭介, 中村誠, 信川京子, 加藤直子, 柴崎祐美, 師井和子(2012)「在宅高齢者のライフスタイルに関する調査研究:性格型とライフスタイル類型と生きがいの関連」日本老年行動科学会第15回大会, 東京, 10月. 4) 原礼子, 柴崎祐美, 佐藤美穂子, 上野まり, 伊達久美子(2013)「医療的ケアを担う家族介護者の身体的・心理的負担感」第17回日本在宅ケア学会学術集会, 茨城, 3月.

氏名	芝田 英昭
著書	芝田 英昭著(2012)『国民を切り捨てる社会保障と税の一体改革の本音』自治体研究社.
論文	<ol style="list-style-type: none"> 1) 芝田英昭(2012)「国民をだます社会保障と税の一体改革の本音」『建交労理論集』建交労, 第53号(2012年夏号) pp.2-26. 2) 芝田英昭(2012)「小児看護における父親へのアプローチ」『小児看護』へるす出版, 第35巻第10号(2012年9月号), pp.1280-1286. 3) 芝田英昭(2012)「孤立化する社会の病理」『住民と自治』自治体問題研究所, 通巻596号(2012年12月号), pp.6-13. 4) 芝田英昭(2013)「社会保障と税の一体改革と医療」『月刊保団連』全国保険医団体連合会, 通巻1118号(2013年3月号), pp.10-18.
学会発表	<ol style="list-style-type: none"> 1) 芝田英昭(2012)「学童保育と社会保障」第47回全国学童保育研究集会, 埼玉(獨協大学), 10月7日. 2) 芝田英昭(2012)「小児がんの子どもの社会保障・社会福祉」第53回日本小児血液・がん学会, 群馬(ベシア文化ホール), 11月25日.
学内・学外 における 社会的 活動等	<ol style="list-style-type: none"> 1) 2012年度共同研究, 代表: 芝田英昭「孤立化防止に関する共同研究」医療生協さいたま生活協同組合 2) 2012年度共同研究, 代表: 芝田英昭「東日本大震災記録聞き取り調査」日本医療福祉生活協同組合連合会 3) 日本社会福祉学会関東部会運営委員 4) 自治体問題研究所理事

氏名	杉山 明伸
学会発表	1) 佐藤千香, 築地美枝, 柴崎陽子, 杉山明伸他(2012)「クリニックソーシャルワーカー

学会発表	<p>の役割」第18回埼玉県医療社会事業学会，埼玉，4月。</p> <p>2) 築地美枝，柴崎陽子，杉山明伸他（2012）「クリニックソーシャルワーカーの業務分析」第62回日本病院学会，福岡，6月。</p> <p>3) 杉山明伸，大橋秀行，藤沼康樹（2012）「看護職との連携協働（パネルディスカッション）」千葉看護学会第18回学術集会，千葉，9月。</p>
学内・学外における社会的活動等	<p>1) 社団法人埼玉県医療社会事業協会会長</p> <p>2) 社会福祉法人ふれあい福祉協会評議員</p> <p>3) 社会福祉法人埼玉県社会福祉協議会契約締結審査会委員</p> <p>4) 自治医科大学附属さいたま医療センター臨床研究倫理審査委員会委員</p>

氏名	長倉 真寿美
資料・研究ノート等	長倉真寿美（2012）「要介護高齢者の地域生活を可能にする地域ケアシステムの構造に関する研究ヒアリング調査報告書」（JSPS科研費21530605）。
学内・学外における社会的活動等	<p>1) 第2期横浜市地域福祉計画策定・推進委員会委員</p> <p>2) 「2025年の地域の姿に向けた地域支援のあり方検討会」委員（横浜市）</p> <p>3) 豊島区介護保険事業計画推進会議委員</p> <p>4) 豊島区事業者選定審査会（A跡地活用）委員長</p> <p>5) 豊島区事業者選定審査会（B跡地活用）委員</p> <p>6) 江東区権利擁護センター「あんしん江東」運営委員会委員長</p> <p>7) 東久留米市 西部地域包括支援センター ケアマネージャー研修会講師</p> <p>8) 韓国ソチョウ区社会福祉施設施設長及び職員の海外研修講師</p> <p>9) (公財) いきいき埼玉 彩の国いきがい大学「若い世代との交流」講師</p> <p>10) コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援プロジェクト（石巻市）</p>

氏名	平野 方紹
著書	<p>1) 平野方紹（2012）「第3章第4節 介護実践にかかわる諸制度 6・7」黒沢貞夫，石橋真二，上原千寿子，白井孝子 編著『介護職員等実務者研修テキスト（450時間研修）第1巻 人間と社会』中央法規出版。</p> <p>2) 平野方紹（2012）「Ⅲ 都道府県・市町村における体制整備の課題 1 市町村障害者防止センター・都道府県障害者虐待防止センターと中核機関 2 障害者虐待への対応とその体制整備」宗澤忠雄 編著『障害者虐待—その理解と防止のために—』中央法規出版。</p> <p>3) 平野方紹（2012）「テーマ4 社会福祉における専門性と資格制度・人材確保 プロローグ・エピローグ」日本社会福祉学会刊行（第3巻編集担当 野口定久，平野方紹）『対論 社会福祉学 第3巻 社会福祉運営』中央法規出版。</p> <p>4) 平野方紹（2012）「第1部第2章 社会福祉行政の実施体制」蟻塚昌克，関川芳孝 編『社会福祉学習双書2013 社会福祉概論Ⅱ—福祉行政と福祉計画／福祉サービスの組織と運営—』全国社会福祉協議会。</p>
論文	<p>1) 平野方紹（2012）「障害児保育政策の新たな展開—障害者制度改革で大きく変わる障害児保育—」『ぜんぽきょう』第299号（全国社会福祉協議会・全国保育協議会），pp.2-7。</p> <p>2) 平野方紹（2012）「消費税増税で社会保障は良くなるのか？—今、本当に必要な改革は何か—」『住民と自治』通巻第595号（自治体問題研究所），pp.6-12。</p>
資料・研究ノート等	平野方紹（2012）「『障害者総合支援法』路線で障害者施設経営の方向性はどうか」『経営協』第346号（全国社会福祉施設経営者協議会），pp.11-12。
学内・学外における社会的活動等	<p>(行政関係)</p> <p>1) 埼玉県自立支援協議会会長</p> <p>2) さいたま市障害者政策委員会委員長</p>

学内・学外 における 社会的 活動等	<ul style="list-style-type: none"> 3) さいたま市地域密着型サービス運営委員会委員長 4) 新座市障害者施策推進協議会会長 5) 志木市地域自立支援協議会会長 6) 川口市障害者計画策定委員会委員長 7) 埼玉県運営適正化委員会委員長 (社会福祉関係) 8) 社会福祉法人全国社会福祉事業団協議会評議員 9) 社会福祉法人東京福祉事業協会第三者委員 (その他) 10) 日本社会福祉学会評議員 11) 介護福祉士国家試験試験委員
-----------------------------	---

氏名	森本 佳樹
学内・学外 における 社会的 活動等	<ul style="list-style-type: none"> 1) コミュニティ福祉学部東日本大震災復興支援プロジェクト・委員長 2) 日本地域福祉学会・理事(～2012.5まで) 3) 日本福祉介護情報学会副代表理事・事務局長 4) 日本生命済生会『地域福祉研究』編集委員 5) 総務省「地域実践活動に関する大学教員ネットワーク」幹事 6) 独立行政法人福祉医療機構 WAM NET 事業推進専門委員会・委員 7) 東京都社会福祉審議会委員 8) 東京都「都内避難者孤立化防止事業」実施地区連絡会・アドバイザー 9) 埼玉県福祉人材センター運営委員会・副委員長 10) 山形県高島町地域福祉計画策定委員会・アドバイザー 11) 和光市介護保険事業計画策定委員会・委員長 12) 和光市地域福祉計画推進委員会・委員長 13) 和光市社会福祉協議会地域福祉活動計画推進委員会・委員長 14) 市川市社会福祉審議会・会長 15) 新宿区外部評価委員会・部会長 16) 練馬区社会福祉協議会地域福祉活動計画推進評価委員会・委員長 17) 練馬区社会福祉協議会ボランティア・地域福祉推進センター運営委員会・副委員長 18) 武蔵野市地域包括支援センター運営協議会・会長 19) 武蔵野市地域リハビリテーション推進協議会・委員 20) 立川市地域福祉計画・立川市社会福祉協議会地域福祉活動計画推進委員会・委員長 21) 立川市社会福祉協議会・スーパーバイザー 22) 横浜市地域福祉計画策定推進委員会・委員長 23) 石川県津幡町地域福祉計画・津幡町社会福祉協議会地域福祉活動計画策定委員会・アドバイザー 24) 熊本県水俣市社会福祉協議会・アドバイザー 25) 埼玉県社会福祉協議会・評議員 26) 社会福祉法人にんじんの会・理事 27) NPO法人福祉の資料と情報・代表 28) NPO法人コレクティブ・理事 29) NPO法人ケア・センターやわらぎ・理事 30) 財団法人育てる会・評議員 31) 平成24年度老人保健健康増進等事業「地域包括ケア推進にあたっての個人情報共有のあり方に関する調査研究事業」(一般社団法人シルバーサービス振興会) 検討委員会委員長(報告書, 2013年3月) 32) 平成24年度老人保健健康増進等事業「地域密着型サービスの質の向上の取組に関する調査研究事業」(NPO法人全国小規模多機能型居宅介護事業者連絡会) 検討委員会委員長(報告書, 2013年3月)

氏名	山口 敬子
資料・研究ノート等	研究代表者・開原久代(2012)「社会的養護における児童の特性別標準的ケアパッケージ—被虐待児を養育する里親家庭の民間の治療支援機関の研究—」厚生労働科学研究費補助金・政策科学総合研究事業平成23年度 総括・分担研究報告書(研究協力者として参加).
学会発表	平田美智子, 三輪清子, 山口敬子「里親支援機関事業の実施状況—平成23年度全国の自治体へのアンケート調査より—」日本社会福祉学会第60回秋季大会.

氏名	湯澤 直美
著書	<ol style="list-style-type: none"> 1) 一般社団法人日本社会福祉学会編(編集担当:平岡公一, 湯澤直美)(2012)『対論社会福祉学2 社会福祉政策』中央法規出版. 2) 湯澤直美(2012)「母子家庭対策における2002年改革の変遷と検証」杉本貴代栄編『フェミニズムと社会福祉政策』ミネルヴァ書房. 3) 湯澤直美(2013)「貧困に晒される人々の健康問題から“自立支援”を問う—被保護母子世帯にみる障害/疾病からの考察」庄司洋子他編『自立と福祉—制度・臨床への学際的アプローチ』現代書館, pp.348-368. 4) 全国学校事務職員制度研究会・「なくそう!子どもの貧困」全国ネットワーク編(2012)『元気がでる就学援助の本—子どもの学びを支えるセーフティネット』かもがわ出版.
論文	<ol style="list-style-type: none"> 1) 湯澤直美, 藤原千沙, 石田浩(2012)「母子世帯の所得変動と職業移動:地方自治体の児童扶養手当受給資格者データから」『社会政策』第4巻第1号, pp.97-110. 2) 湯澤直美(2012)「平成23年度全国母子世帯等調査」にみるひとり親世帯の動向—学歴指標の導入に焦点をあてて—『貧困研究』vol.9. 明石書店, pp.126-138.
資料・研究ノート等	<ol style="list-style-type: none"> 1) 湯澤直美(2012)「絆の拠りどころを失う女性たちの現状」『婦人新報』No.1334, 日本キリスト教婦人矯風会, pp.2-5. 2) 湯澤直美(2012)「論点社会福祉 子どもの貧困の可視化を」『月刊福祉』2013年4月号, pp.50-51. 3) 湯澤直美(2012)「巻頭言 子どもの餓死事件が問うていること—裁く社会/裁かれる“母”/女性と貧困—」『貧困研究』vol.9. 明石書店, pp.2-3. 4) 湯澤直美(2012)「女性の貧困—ジェンダーの視点からみた貧困—」『東京都女性相談センター通信』東京都女性相談センター. 5) 湯澤直美(2012)「大震災と子どもの貧困白書」『クレスコ』2012年7月号. 6) 湯澤直美(2012)「みようとする意志がなければ、みえないものがある」『婦人通信』2013年2・3月合併号. 日本婦人団体連合会, pp.2-3.
学会発表	湯澤直美(2012)「ナショナルリティとジェンダーから読み解く包摂的社会政策」第60回日本社会福祉学会国際学術シンポジウム, 兵庫, 10月.
学内・学外における社会的活動等	<ol style="list-style-type: none"> 1) 厚生労働省「婦人保護事業検討委員会」委員 2) 一般社団法人「日本社会福祉学会」理事(2012年10月まで) 3) 日本社会福祉系学会連合 事務局長(2012年10月まで) 4) 全国社会福祉協議会・母子生活支援施設協議会 中央推薦協議委員 5) 全国社会福祉協議会・母子生活支援施設協議会「母子生活支援施設運営の手引書編集委員会」委員 6) 東京都社会福祉協議会「平成24年度 低所得世帯の子どもへの支援構築プロジェクト」委員長 7) 東京都社会福祉協議会「平成24年度 自立生活スタート支援事業運営審査委員会」副委員長 8) 社会福祉法人「礼拝会」評議員 9) 社会福祉法人「ベテスタ奉仕女母の家」理事 10) 一般社団法人「彩の国子ども・若者支援ネットワーク」理事 11) 『貧困研究』(明石書店)編集委員会委員 12) 2012年度~2013年度立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)自由プロジェクト

学内・学外 における 社会的 活動等	研究「自立と福祉をめぐる制度・臨床への学際的アプローチに関する研究」(研究分担者)
	13) 2012年度～2013年度立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)東日本大震災・復興支援関連研究「被災地および被災者の支援のあり方に関する探索的研究～生活者の視点から～」(研究分担者)
	14) 2010年度～2015年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「“うつ病者の社会的支援”および“自殺予防”に関するソーシャルモデル研究・開発」(分担研究者)
	15) 独立行政法人福祉医療機構「平成24年度社会福祉振興助成金 子どもの貧困支援活動ネットワーク化促進事業」(申請代表者)
	16) 研修会講師「平成24年度児童・女性福祉連絡会学習会」東京都社会福祉協議会児童・女性福祉連絡会
	17) 研修会講演「第34回全国母子生活支援施設職員研修会」全国社会福祉協議会・母子生活支援施設協議会
	18) 研修会講演「平成24年度全国婦人保護施設等研究協議会」全国婦人保護施設等連絡協議会
	19) 研修会講演「平成24年度全国婦人相談員・心理判定員研究協議会」
	20) 研修会講師「アスポート教育支援 学習支援ボランティア全体研修」埼玉県アスポート事業
	21) 研修会講師「ひとり親家族サポーター養成講座」インクルいわて
	22) 研修会講演「江東区子ども家庭相談研修」江東区
	23) 研修会講演「平成24年度 民生委員・児童委員生活福祉資金研修会」社会福祉法人東京都社会福祉協議会等
	24) 研修会講師「第70回母子福祉研修会」神奈川県社会福祉協議会・母子生活支援施設協議会

スポーツウエルネス学科

氏名	安藤 佳代子
資料・研究ノート等	安藤佳代子, 桜井伸二, 島典弘 (2013) 「脊髄損傷レベルが車いすの直線駆動能力に及ぼす影響」東海学園大学研究紀要18号, pp.25-30.
学会発表	1) 安藤佳代子 (2012) 「車いすテニスのフィットネステスト種目とランキングの関係—車いすの動きに着目して—」第21回運動学習研究会, 大阪大学. 2) Kayoko Ando (2012) Relationship between Physical Fitness Test Scores and Match Performance in Wheelchair Tennis Athletes, 12th Asian Society of Adapted Physical Education and Exercise Symposium, The Hong Kong Institute of Education.
学内・学外における社会的活動等	日本車いすテニス協会理事

氏名	石井 秀幸
論文	1) Ishii H., Yanagiya T., Naito H., Katamoto S., Maruyama T. (2012) “Theoretical study of factors affecting ball velocity in instep soccer kicking”, Journal of Applied Biomechanics, vol.28, no.3, pp.258-270. 2) 石井秀幸, 丸山剛生 (2012) 「有限要素解析によるカーブキックのインパクトにおけるボール挙動シミュレーション」『日本機械学会シンポジウム：スポーツ・アンド・ヒューマン・ダイナミクス2012講演論文集』no.12.39, pp.486-490.

学会発表	<ol style="list-style-type: none"> 1) 川北裕之, 石井秀幸, 加藤晴康 (2012) 「サッカーにおけるオスグッド病発症予防の新しいアプローチ」日本フットボール学会 10th Congress, 国立スポーツ科学センター, 12月. 2) 石井秀幸, 丸山剛生 (2012) 「有限要素解析によるカーブキックのインパクトにおけるボール挙動シミュレーション」日本機械学会シンポジウム: スポーツ・アンド・ヒューマン・ダイナミクス2012, 愛知大学, 11月. 3) 川北裕之, 石井秀幸, 加藤晴康, 天野由里佳, 高田佑輔, 林大輝, 舟崎裕記 (2012) 「サッカー動作におけるオスグッド病発症の危険因子」第23回日本臨床スポーツ医学学会学術集会, 新横浜プリンスホテル, 11月.
学内・学外における社会的活動等	科学研究費補助金 若手研究 (B) 「有限要素解析を用いたカーブおよび無回転キックにおけるボール挙動シミュレーション」, 研究代表者, 2011-2012年度

氏名	石渡 貴之
論文	満石寿, 遠藤伸太郎, 石渡貴之, 安松幹展, 濁川孝志, 大石和男 (2012) 「4日間の連続した軽・中等度強度身体運動が唾液中分泌型免疫グロブリンAおよび気分にあぼす影響～運動習慣のない男性を対象として～」日本生理人類学会誌, 17巻3号, pp.95-108.
資料・研究ノート等	Takayuki Ishiwata, Kota Suzuki, Chisa Ninomiya, Shinya Yanagita, Hiroshi Hasegawa (2013), Comparison of monoaminergic neurotransmitters in the hypothalamic area under several environmental conditions, The Journal of Physiological Sciences, Supplement 1, 63, S268.
学会発表	<ol style="list-style-type: none"> 1) 石渡貴之, 鈴木航太, 二宮千紗, 柳田信也, 長谷川博 (2013) 「様々な環境条件下におけるラット視床下部領域のモノアミン作動性神経伝達物質の比較」, 第90回日本生理学会大会, 東京, 3月. 2) Takayuki Ishiwata, Satomi Takatsu, Hiroshi Hasegawa (2012), "Relationship between serotonin levels in the ventral tegmental area and thermoregulation in freely moving rats." 17th Annual Congress of the European College of Sports Science, Bruges, 7月. 3) 二宮千紗, 鈴木航太, 依田珠江, 石渡貴之 (2012) 「運動鍛錬者における異なる水温による寒冷血管拡張反応の差異」, 第67回日本体力医学会大会, 岐阜, 9月. 4) 鈴木航太, 二宮千紗, 柳田信也, 長谷川博, 石渡貴之 (2012) 「隔離飼育と集団飼育での脳内神経伝達物質の比較」, 第67回日本体力医学会大会, 岐阜, 9月.
学内・学外における社会的活動等	(学内) <ol style="list-style-type: none"> 1) 広報委員会 委員長 (学外) <ol style="list-style-type: none"> 2) 公益社団法人 全国大学体育連合 常務理事, 指導者養成委員会 委員長

氏名	今西 平
論文	<ol style="list-style-type: none"> 1) 今西平, 小芝裕也, 前島悦子 (2013) 「自転車運動中の音楽刺激が生理学的反応および主観的運動強度にあぼす影響」『身体運動文化論叢』第12号, pp.133-152. 2) 宮辻和貴, 今西平, 加藤大門 (2012) 「冬季実習における女子大学生のスキーに関するアンケート調査」『教育研究センター紀要』第8号, pp.43-54.
学会発表	<ol style="list-style-type: none"> 1) 今西平, 出井章雅, 鈴木奈都美, 小芝裕也, 松原慶子, 岡西康法, 村元辰寛, 梅林薫 (2012) 「国内女子トップテニス選手に関するジュニア時代の体力分析」日本体育学会第63回大会, 東海大学, 8月. 2) 鈴木奈都美, 岡西康法, 出井章雅, 村元辰寛, 松原慶子, 今西平, 梅林薫 (2012) 「大学エリートテニス選手におけるSpeed・Agility能力に関する体力的研究」日本体育

学会発表	<p>学会第63回大会, 東海大学, 8月.</p> <p>3) Imanishi, T., Matsubara, K., Dei, A., Umabayashi, K., (2012) "The physical strength elements and standards necessary for a Japanese elite junior tennis player" International Convention on Science, Education & Medicine in Sport 2012, Glasgow, 7月.</p>
学内・学外における社会的活動等	<p>1) 関西テニス協会・スポーツ科学部門委員 (2010年～2012年)</p> <p>2) 神戸親和女子大学・地域交流事業「地域福祉活動」主担当者 (2011年～2012年)</p> <p>3) 神戸市および北区社会福祉協議会主催「ふれあい喫茶」企画・運営 (2012年)</p>

氏名	大石和男
論文	<p>1) 満石寿, 遠藤伸太郎, 石渡貴之, 安松幹展, 濁川孝志, 大石和男 (2012) 「4日間の連続した軽・中等度強度身体活動が唾液中分泌型免疫グロブリンAおよび気分に及ぼす影響: 運動習慣のない被験者を対象として」, 日本生理人類学会誌, 17(3): pp.95-108.</p> <p>2) 遠藤伸太郎, 満石寿, 和秀俊, 大石和男 (2013) 「13項目7件法版Sense of Coherence scale (SOC-13) の信頼性と1因子モデルの妥当性の検討—大学生を対象としたデータから—」, 立教大学コミュニティ福祉学部紀要第15号, pp.25-38.</p>
資料・研究ノート等	大石和男 (2013) 「大学における私語問題を考える」, 立教大学コミュニティ福祉学部紀要第15号, pp.75-90.
学会発表	<p>1) Endo S., Kanou H. and Oishi K. (2012) Relationship between the habit of exercise and Sense of Coherence among retired males in Japan. Official Journal of the American College of Sports Medicine, 44(5): S605 (Supplement).</p> <p>2) Mitsuishi H., Ishiwata T., Kato H., Endo S., Yasumatsu M., Kanou H., Nigorikawa T., Matsuo T., Matsuyama M. and Oishi K. (2012) Relationships between Mood and Salivary Secretory Immunoglobulin A in Tailored Exercises. Official Journal of the American College of Sports Medicine, 44(5): S643 (Supplement).</p> <p>3) Tanaka T., Yoshimura Y., Yasukawa M. and Oishi K. (2012) Skill differences for elite sprint freestyle competitive swimmers. Official Journal of the American College of Sports Medicine, 44(5): S (Supplement).</p> <p>4) Kase T., Endo S., Yano M. and Oishi K. (2012) A study of the depressive tendency for Japanese college athletes: influences of SOC and neuroticism. 17th European College of Sport Science, Book of Abstract: P.422.</p> <p>5) Nigorikawa T., Endo S., Shintani K., Kato H., Ishiwata T., Kanou H., Hirono M., Yasukawa M. and Oishi K. (2012) Effects of the SUMO exercise on alleviating lower back pain. 17th European College of Sport Science, Book of Abstract: P.372.</p> <p>6) 矢野麻梨奈, 遠藤伸太郎, 嘉瀬貴祥, 大石和男 (2012) 「大学生における抑うつ傾向とタイプA行動様式の関係にSense of Coherenceが及ぼす影響」第25回日本健康心理学会大会発表論文集, P.109.</p> <p>7) 北見由奈, 遠藤伸太郎, 満石寿, 嘉瀬貴祥, 大石和男 (2012) 「大学生の楽観性および自尊心がレジリエンスに及ぼす影響」第25回日本健康心理学会大会発表論文集, P.132.</p> <p>8) 新谷健介, 遠藤伸太郎, 嘉瀬貴祥, 大石和男 (2012) 「被災者に対する心理面への長期的で効果的な支援の探索—阪神淡路大震災の語りより—」立教大学コミュニティ福祉学会「まなびあい」第5回年次学会 (埼玉).</p> <p>9) 遠藤伸太郎, 嘉瀬貴祥, 矢野麻梨奈, 大石和男 (2012) 「大学生のスポーツ・運動経験とSense of Coherence (SOC) および心理・社会的資源との関連性」第39回日本スポーツ心理学会大会研究発表抄録集, P.184-185.</p> <p>10) 嘉瀬貴祥, 矢野麻梨奈, 遠藤伸太郎, 大石和男 (2013) 「大学生におけるライフスキルとソーシャル・サポートおよびGHQの関連: ライフスキルにおけるアセスメント指標の開発に向けた予備的研究」日本学校メンタルヘルス学会第16回大会プログラム・抄録集, P.66.</p>

学内・学外 における 社会的活動等	埼玉県 彩の国生きがい大学講演会講師 2012年7月5日
-------------------------	------------------------------

氏名	加藤 晴康
論文	<ol style="list-style-type: none"> 1) 林大輝, 舟崎裕記, 六本木哲, 小田治男, 加藤晴康, 丸毛啓史 (2012) 「若年サッカー選手に発生したリスフラン関節脱臼骨折の1例」『日本整形外科学会雑誌』32(1) pp.34-37. 2) 遠藤伸太郎, 和秀俊, 石渡貴之, 加藤晴康, 安川通雄, 濁川孝志, 大石和男 (2012) 「大学生の腰痛と心理的要因の関連性」『体力科学』61(1) pp.71-78.
学会発表	<ol style="list-style-type: none"> 1) H. Kato, M. Dohi, T. Fukubayashi, The 11+ warm-up programme for the prevention of injuries in the Japanese junior football team, The fourth edition of the Confederation of African Football [CAF] Medical Congress, 11-14 March, 2012, in Casablanca, Morocco. 2) H. Kato, M. Dohi, T. Fukubayashi, Osgood-Schlatter disease in the Japanese Junior Football Team. , The fourth edition of the Confederation of African Football [CAF] Medical Congress, 11-14 March, 2012, in Casablanca, Morocco. 3) 「ナショナルトレーニングセンター U-12サッカー選手のオスグッド病の発症リスク検討」 菱村亮介, 笠原靖彦, 中野和彦, 加藤晴康, 福林徹, 眞島任史, 第4回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会, 2012. 4) 「医師と理学療法士におけるスポーツ復帰状況の認識調査 復帰度スケールを用いて」 林大輝, 舟崎裕記, 加藤晴康, 川井謙太郎, 伊藤咲子, 丸毛啓史, 第14回日本臨床スポーツ医学会, 2012. 5) 「サッカー動作におけるオスグッド病発症の危険因子」 川北裕之, 石井秀幸, 加藤晴康, 天野由里佳, 高田佑輔, 林大輝, 舟崎裕記, 第14回日本臨床スポーツ医学会, 2012 PageS195 (2012. 10).
学内・学外 における 社会的 活動等	<p>(講演会)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 水分補給セミナー, U12 全日本少年サッカー大会, 時之栖, 静岡 2012年7月 2) スポーツ医学 日本サッカー協会コーチ養成講習会 公認B級コーチ講習会, 時之栖 静岡, 2012年11月 3) U12に必要なメディカル 日本サッカー協会コーチ養成講習会 U12 A級コーチ講習会, 時之栖 静岡, 2012年6月15日 4) U12に必要なメディカル 日本サッカー協会コーチ養成講習会 U12 A級コーチ講習会, 宇城 熊本, 2012年6月30日 5) 体幹トレーニングと外傷・障害予防 日本サッカー協会コーチ・リフレッシュ研修会, JFAハウス 文京区 東京 2012年11月25日 6) サッカーに導入された傷害予防ウォーミングアップの新しい考え方 第4回順天堂整形外科学会スポーツフォーラム 2012年9月29日 順天堂大学 東京 7) トップアスリートから学ぶケガ予防の準備運動 東京ドームスポーツ スポーツ医学セミナー 2012年5月 東京ドーム 東京 8) スポーツドクターの仕事 ―外傷・障害予防へのアプローチ― 第5回 Fukushima Orthopaedic Sports Seminar (FOS) 2012年12月1日 福島 福島 9) ジュニア・アスリートに対するスポーツ外傷予防への取り組み サッカー 日本臨床スポーツ医学会 公開シンポジウム 2012年1月28日 東京 10) サッカーの現場でのスポーツ外傷と障害―世界に羽ばたく選手を育てるために― 東京都臨床整形外科医会「四市の会」 2012年2月2日 調布 東京 <p>(社会的活動)</p> <ol style="list-style-type: none"> 11) 日本サッカー協会 スポーツ医学委員会 委員 12) JOC情報・医科学専門委員会 科学サポート部会員 13) サッカー男子日本代表チームドクター キリンチャレンジ 2012年2月19日-23日 14) 聖マリアンナ医科大学非常勤講師 15) 白鷗大学非常勤講師 16) 九州保健福祉大学非常勤講師

氏名	杉浦 克己
著書	1) 杉浦克己(2012)「アスリートの栄養管理」馬場忠雄, 山城雄一郎編『新臨床栄養学第2版』医学書院. 2) 杉浦克己(2013)「第12章 アスリートの栄養サポートサプリメント」矢澤一良監修『機能性スポーツフードの開発』シーエムシー出版.
論文	1) 杉浦克己(2012)「アスリートのための栄養学を暮らしのスポーツにどう役立てるか」『FOOD Style 21』第16巻 第4号, pp.29-32. 2) 杉浦克己, 山内崇靖, 酒井健介(2012)「東日本大震災被災者の栄養摂取状況」『ウェルネスジャーナル』第9巻 第1号, pp.19-21. 3) 杉浦克己(2012)「トップメディカルドクターにきく～スポーツ選手の栄養学～」『Arthritis』第10巻 第3号, pp.82-86. 4) 杉浦克己(2012)「エネルギーインプットとしての栄養測定」『体育の科学』第62巻 第10号, pp.757-760.
学会発表	1) 杉浦克己, 山内崇靖, 大塚光太郎, 酒井健介(2012)「東日本大震災被災者の栄養摂取状況—仮設住宅居住者を中心に—」日本ウェルネス学会第9回大会, 沖縄, 9月. 2) 篠田和穂, 杉浦克己(2012)「女子学生の食に対する意識とボディ・イメージ」日本ウェルネス学会第9回大会, 沖縄, 9月.
学内・学外における社会的活動等	1) JOC科学サポート部会員 2) 日本陸上競技連盟科学委員会委員 3) 日本アイスホッケー連盟強化スタッフ(医科学スタッフ)

氏名	濁川孝志
論文	1) 遠藤伸太郎, 和秀俊, 石渡貴之, 加藤晴康, 安川通雄, 濁川孝志, 大石和男(2012)大学生の腰痛と心理的要因の関連性 体力科学 61(1) pp.71-78. 2) 満石寿, 石渡貴之, 濁川孝志, 大石和男(2012)簡便な客観指標によるストレス評価および個人に適した運動プログラム開発の重要性—免疫プログリンAの観点から—『コミュニティ福祉学部紀要』立教大学 第14号 pp.127-140. 3) 濁川孝志, 遠藤伸太郎, 満石寿(2012)自然環境がスピリチュアルな講義の効果に及ぼす影響—自然がもたらすスピリチュアリティの向上の可能性—『日本トランスパーソナル心理学/精神医学』12(1): pp.82-95. 4) 満石寿, 遠藤伸太郎, 石渡貴之, 安松幹展, 濁川孝志, 大石和男(2012)4日間の連続した軽・中等度強度身体運動が唾液中分泌型免疫グロブリンAおよび気分及びぼす影響—運動習慣のない男性を対象として—『日本生理人類学会誌』17(3) pp.95-108. 5) 濁川孝志(2012)環境問題とスピリチュアリティ—3.11から何を学ぶのか—『アリーナ』(中部大学編)14, pp.360-370.
学会発表	Nigorikawa, T., Endo, S., Shintani, K., Kato, H., Ishiwata, T., Kanou, H., Hirono, M., Yasukawa, M., Oishi, K. (2012) Effects of the sumo exercise on alleviating lower back pain. 17th European College of Sport Science, Book of Abstract: p.372.
学内・学外における社会的活動等	公開講演会, 映画上映会(地球交響曲第5番)「3.11を超えて、僕らはどこを目指すべきか」開催(コミュニティ福祉研究所主催)2012年12月2日

氏名	沼澤 秀雄
著書	1) 沼澤秀雄(2012)「こどものスポーツ活動と水分補給」キッズアスレティックス研究会編集『キッズアスレティックス教本[第1版]』東京平版. 2) 沼澤秀雄(2012)「中高年のスポーツ活動と水分補給」キッズアスレティックス研究会編集『マスターズアスレティックス教本[第1版]』東京平版.

論文	Peñailillo, L, Blazevich, A., Numazawa, H., Nosaka, K.(2013) “Metabolic and Muscle Damage Profiles of Concentric versus Repeated Eccentric Cycling” Medicine and Science in Sports and Exercise, Printing.
学会発表	Peñailillo, L, Blazevich, A., Numazawa, H., Nosaka, K.(2012) “METABOLIC CHARACTERISTICS AND MUSCLE DAMAGE PROFILE OF REPEATED BOUTS OF ECCENTRIC CYCLING IN COMPARISON TO CONCENTRIC CYCLING” 17 th Annual Congress of the European College of Sport Science. Bruges, July.
学内・学外における社会的活動等	1) 日本陸上競技連盟普及・育成委員 U-15指導者講習会講師, トップトレーニングキャンプ講師 2) 日本サッカー協会フィジカルプロジェクト委員 指導者養成S級, U-12A級, B級講師 3) 国際陸上競技連盟コーチ教育認証制度IAAF CECSレベルI レベルI講習会講師 インストラクター養成講習会講師

氏名	松尾 哲矢
著書	松尾哲矢「レクリエーション」他, 社会教育・生涯学習辞典編集委員会編『社会教育・生涯学習辞典』, 朝倉書店.
論文	1) 松尾哲矢, 河西正博, 及川晋平, 依田珠江, 安松幹展「わが国における障害児のスポーツ環境構築に関する基礎的研究」SSFスポーツ政策研究第1巻1号: pp.242-250. 2) 松尾哲矢「カナダにおけるスポーツ政策過程に関する研究」平成22年度～平成24年度 文部科学省科学研究費補助金「基盤研究 (B)」研究成果報告書『スポーツ政策の公共性に関する国際比較研究』(研究代表者: 菊幸一 (筑波大学)) pp.86-100.
資料・研究ノート等	1) 松尾哲矢, 一ノ瀬和夫「学部長対談 完成年度を迎えて 異文化コミュニケーション学部・コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科」『立教』Spring・2012:46-59 立教大学. 2) 松尾哲矢「コミュニティ福祉学研究科紀要巻頭言」『コミュニティ福祉学研究科紀要』第11号: 1. 3) 松尾哲矢『文部科学省委託事業「元気アップ親子セミナー」平成24年度実施報告書』公益財団法人日本レクリエーション協会. 4) 松尾哲矢『文部科学省委託事業「ライフステージに応じたスポーツ活動の推進のための調査研究報告書』公益財団法人日本レクリエーション協会. 5) 松尾哲矢『文部科学省委託事業「高齢者体力づくり事業」報告書』公益財団法人日本レクリエーション協会.
学会発表	河西正博, 和秀俊, 兒玉友, 松尾哲矢「身体に障害のある児童生徒の体育授業に関する研究—全国の肢体不自由特別支援学校の調査から」日本体育学会第63回大会 (東海大学).
学内・学外における社会的活動等	1) 一般社団法人日本私立大学連盟「学生委員会生活実態調査分科会」分科会長 2) 一般社団法人日本私立大学連盟「学生委員会」委員 3) 文部科学省委託 (公益財団法人日本レクリエーション協会)「ライフステージに応じたスポーツ活動の推進のための調査研究スポーツ活動推進戦略会議」委員長 4) 文部科学省委託 (公益財団法人日本レクリエーション協会)「高齢者の体力づくり支援事業ニューエルダー体力づくり支援委員会」委員 5) 文部科学省委託「おやこ元気アップ事業 公益財団法人日本レクリエーション協会事業実行委員会」委員 6) 笹川スポーツ財団「SSFスポーツライフ調査委員会」委員 7) 公益財団法人日本体育協会「指導者育成専門委員会」委員 8) 公益財団法人日本体育協会「指導者育成専門委員会 指導者活動推進部会」部会長 9) 公益財団法人日本体育協会「指導者育成専門委員会 指導者育成システムアドバイザー会議」委員 10) 公益財団法人日本体育協会「指導者育成専門委員会 情報誌編集部会」副部会長 11) 公益財団法人日本体育協会「スポーツ医・科学専門委員会『子どもの発達段階に応じ

学内・学外 における 社会的 活動等	た体力向上プログラム実技指導者講習会実施事業における有識者会議」委員 (学会関係) 12) (社)日本体育学会体育社会学専門領域研究委員 13) 日本スポーツ社会学会 研究委員会 委員長 14) 日本レジャー・レクリエーション学会 常任理事 15) 日本レジャー・レクリエーション学会 学会賞選考委員会 委員長
-----------------------------	--

氏名	安松 幹展
論文	1) 安松幹展 (2012) 「日本代表チームにおけるゲーム中のフィジカルパフォーマンス」『フットボールの科学』, 第7巻, pp.4-9. 2) Nakamura D, Suzuki T, Yasumatsu M, Akimoto T.(2012) “Moderate running and plyometric training during off-season did not show a significant difference on soccer-related high-intensity performances compared with no-training controls”, J Strength Cond Res. Vol.26, no.12, pp.3392-3397.
資料・研究 ノート等	1) 安松幹展 (2012) 「日本人のフィジカルの特徴とは何か?④まとめ」『JFA Technical News』, 日本サッカー協会技術委員会, Vol. 51, pp.44-45. 2) 安松幹展 (2012) 「日本人のフィジカルの特徴とは何か?⑬ボールを使用したスピードトレーニング」『JFA Technical News』, 日本サッカー協会技術委員会, Vol. 50, pp.44-45. 3) 安松幹展 (2012) 「日本人のフィジカルの特徴とは何か?⑫ボールを使用したスピード持久力トレーニング (乳酸産生トレーニング)」『JFA Technical News』, 日本サッカー協会技術委員会, Vol. 49, pp.42-43. 4) 安松幹展 (2012) 「日本人のフィジカルの特徴とは何か?⑪ボールを使用したスピード持久力トレーニング (乳酸耐性トレーニング)」『JFA Technical News』, 日本サッカー協会技術委員会, Vol. 48, pp.44-45.
学会発表	1) 前迫雅人, 中村大輔, 安松幹展, 2週間のオフがサッカーの試合中のフィジカルパフォーマンスに及ぼす影響, 日本フットボール学会10th Congress, 2012. 2) 石崎聡之, 安松幹展, 戸苅晴彦, 西川誠太, サッカー選手におけるゲーム時の運動量, 日本フットボール学会10th Congress, 2012. 3) D. Nakamura, M. Maesako, Y. Iida, H. Koga, K. Uemukai, T. Akimoto, M. Yasumatsu. The effect of off-training period high-intensity running training on YOYOIR2 and VMA in collegiate soccer players. 3rd World Conference on Science and Soccer, Ghent / Belgium, 2012. 4) Ishizaki, S., Yasumatsu, M., Match running performance in Japanese older soccer player, ECSS, 2012.
学内・学外 における 社会的 活動等	1) 日本体力医学会評議委員 2) 日本フットボール学会理事 3) 日本サッカー協会技術委員会フィジカルフィットネスプロジェクトメンバー 4) 日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会「スポーツ活動中の熱中症予防に関する研究」研究班員

氏名	Katrin Jumiko LEITNER (ライトナー・カトリン・友海子)
学会発表	1) Leitner K. (2012) “Career Development of Japanese Athletes. From First Career in Competitive Sports to Second Career in Professional Life.” 8 th German-Japanese Symposium: Development through sport and renewing its cultural value, Muenster. 2) Leitner K. (2013) 「トップアスリートのセカンドキャリア問題を考える：日欧のシステム論的観点から」(国際シンポジウム講演「トップアスリートのセカンドキャリアを考える」) 筑波大学大学院人間総合科学研究科. 3) Leitner K. (2013) “Sporting, Educational and Professional Career Path of Japanese

学会発表	Athletes. The Compatibility of Competitive Sports with Education and Profession and the Transition to Second Career after Retirement in the Career Development of Japanese Athletes.” PhD Workshop in Japanese Studies in East and Central Europe 2013 (Japan Foundation Budapest).
学内・学外における社会的活動等	<ol style="list-style-type: none"> 1) NPO法人スマイルクラブ（総合型地域スポーツクラブ，千葉県柏市）オーストリア地域スポーツクラブ視察・調査でウィーン訪問 通訳（2012年4月3～9日） 2) NPO法人スマイルクラブ（総合型地域スポーツクラブ，千葉県柏市）ドイツ地域スポーツクラブや心臓リハビリ活動の視察・調査でフランクフルト訪問 通訳（2012年10月30日～11月2日）